

山村語抄

菅谷泰昌

柳田國男先生の山村語彙は有益なものである。予は之れに追補のつもりと云ふと頗る滑稽であるけれども本文の百余語は之れに出てゐない言葉を予の手記中から拾ひ集めて見たものである。

語彙には古い言葉が集められてゐるが本文には比較的新しいものやら訛語、俗語まで混つてゐるが別段省きも仕ないでをいた。

一郡は劣か一村を隔てゝさえ言葉を同じくしない例もあるから地名は採集の儘、長々しく載せた。

予は十三、四年來山野を跋渉してゐるものである。本文は其間自ら採集したもので只越前今立郡下池田村に關するもの丈けは家翁杏溪老人の手記によつた。他に書籍等から採集した言葉は無い。

本文中判り切つた言葉の混るのは予の淺學寡聞の致す處であるが些か考ふる所あつてのものもある。解釋などに就きては大方の垂示を只管冀ふものである。

アイノカゼ 丹後與謝郡では夏吹く涼しむ風で

止めば必ず雨が降る。加賀江沼郡でも、此の風を斯く云ふ。

アク 阿久津と云ふ地名が武藏大里郡にも見られ下野の那珂川沿岸にも見られ又岩代會津あたりでも、阿久津、阿久戸、悪戸、阿久戸平と云ふ小字の地名が多い。而して此等の地形は、大抵川沿ひの處であつて所謂河段丘の上部に名づけられてゐる様に思はれる。

因みに會津地方で踵のことをアクトと云ひ中通り(福島縣の東北線の沿線)ではアクトと云つてゐる。

アズ 武藏入間郡に阿須と云ふ所がある。猶同郡内の小字名でアズの語を冠した地名を屢々見受ける、磐城石川郡でもアズサハなど云ふ

地名を見たことがある。

大小の差こそあれ、何れも崩岸の附近に其の位置を占めてゐる。

萬葉に(三二、五三九)「崩岸の上に駒を繫ぎて危ほかど他妻兒ろを息に我がする。」又た(三、五四一)「崩岸邊から駒の行こ如す危はども、人妻兒ろをまゆかせらふも略解に、「字鏡に卍、崩岸也久豆禮又阿須とある是れなり、俗に言ふ崖の危き所なりと言へり、是なる可し」と、

アズミ 丹後與謝郡では家の床の間のある側をカミアズミと云ひ入口の側をシモアズミと云ふ。因みに加賀江沼では家の棟より左右に分ちて座敷納戸と續く方をオトコガハ、佛間、次の間と續く方をオンナガハと云ふ。

アセミ 武藏入間郡では山櫛のことを云ふ。

アツバ 越前今立郡下池田村の童語で糞のこと。磐城石川郡ではアツボ、厠をアツポヤと云ひ越後長岡では厠のことをアツバンジョ又はカンジョとも云つてゐる。

アヘボ 加賀江沼郡で鞘大角豆のこと。

アマヤ 常陸久慈郡で納屋のこと。

イケ 丹後與謝郡では井戸の淺きものをイケ。深きものをイドと云ふ。

イス、磐城石川郡では石臼のこと。

イセチ 丹後與謝郡では舊八月頃北微東方より吹く暴風のこと、この風のあとには洪水が多いとされてゐる。

イリノザシキ 岩代

南會津郡では農家

の最も奥まつた一番上等とする間を云ふ。

床	タナ		
イリノ	ザシキ	ナンド	
ナカノ	ザシキ	オザリ	
ロコドイダ			

オエ 丹後與謝郡では座敷のこと、加賀江沼郡の農家では爐を切つてある土間の次の間のこと。

オキアジ 丹後與謝郡では鱒のこと。

オリノザ 伊リノザシキ參照。

オダレ 武藏入間郡で軒下のこと。

オトバ 加賀で鼯鼠のことであるが屢々狐のことにも混用されてゐることがある、猶貂のこととをテントバと云つてゐる。

オホアスビ 武藏入間郡高麗村梅原に今も尙舊曆二月十七日に行はるゝ行事である。此日オヒマチノ番と云ふて宿に成つた家へ朝七時頃から區民(戶主たるもの)が集合して家格の順に並び上座のもの、挨拶、キバンのゝもの挨拶などの式を嚴かに濟まし、これから朝食を攝り次にホンバンとて大椀飯を高盛にぐんぐん押付けたるもの其量尤に五合はあると云はれるものを一粒も餘さず食ふのであるが是れは斷じて食はねばならぬことに成つてゐるのである。菜は一汁一菜位で汁番と云ふ當番のものが巻織汁(此の邊ではケンチンと云ふが、丹後では原語の通りケンチャンと云つてゐる)などを盛る役を爲しキバンと云ふ役のものが菜を作り酒の方など掌どる。そうして夜の七時頃まで飲んだり食つたりする。此の間に一

年中の村の係りの整理やら區の役員の改選やらをする。此の日に用ふる什器は區で所持して居り其他の費用は前日に各戸から米一升と汁代(酒代も含む)として五錢か三錢宛集めたものである。

四、五十年前迄は舊高麗郡一帯に行はれたものであるが、今では僅かに此の一區のみ遺風を守つてゐるに過ぎない。

オボクサマ 加賀で佛前への供飯及び其の器具を云ふ。西鶴の「好色一代女」の中には御佛供様とある。

カイダレ 能登輪島では軒下のこと。遠江小笠郡では出入口をカイダレグチと云ふ。

カウベリ 加賀江沼郡では俗に云ふオヤツのこと。

カーカ 越前今立郡下池田村では椿のこと。

カダチ 岩代信夫郡伊達郡では夕立のこと。

ガツカモ 丹後與謝郡では源五郎蟲のこと。

ガヅツカ 武藏入間郡飯能附近では竹の皮草履

のこと。又たガツ草履とも云つてゐる。岩代南會津ではカツと云つてゐる。

カツバ 常陸久慈郡大子附近では篠や萱の切株のこと。

カツミ 丹後與謝郡では、みづうみのこと。

カフタケ 加賀大聖寺附近では草茸のこと岩代南會津郡では猪茸と云つてゐる。深山でなければ無い茸で胃に好いそうである。

カモリ 加賀では冬瓜のこと。

カヤ 丹後與謝郡では熊笹のこと。加悦と云ふ地名がある。熊笹に因める名か、どうかは知らぬが、兎も角一寸附記しておく。

カヤツンブリ 丹後與謝郡では鷹鷲のこと。

ガンギ 越後では雪廊下兼用の庇を云ひ雁木なる字を當てゝゐる。越前今立郡では軒をガケと云ふ。家翁の説に之れ蕨牙ならんかと。

カンバ 磐城助川。岩代南會津あたりで頭の火傷か腫物のあとの禿のこと。加賀江沼郡では頭の腫物、俗に云ふクサのこと。

カンブラ 磐城田村郡、石川郡では馬鈴薯のこと。加賀ではゴシヨイモ、丹後與謝郡ではハツシヨイモと云つてゐる。

キツチヨギリ 上野群馬郡桃井あたりで切株のこと。

クボエ 岩代南會津郡では犬の遠吠のこと。遠吠すること、クボエカクと云つてゐる。

クム 安房や相州横須賀あたりで、山が崩れることを山がクムと云ふ。

クラヤ 丹後與謝郡では納屋のこと。

クロギタ 丹後與謝郡では冬、眞北から吹く風を云ふ。

ケデ 上野利根郡水上では蓑のこと。磐城石川郡ではミスと云つてゐる。

ケンゾウ 加賀江沼郡では豆腐の殻のこと。

コウカ 越前今立郡下池田では合歡木のこと。

コクマ 越前今立郡下池田では苔のこと。

コザラ 丹後與謝郡では細霰のこと。

コシモト 岩代會津で爐端に於いて客座即ちム

カヒザに相對する座、横座に主人が据ればコシモトに妻が据はる、猶ムカヒザを參照。

ゴネ 丹後與謝郡では大きい鰻魚はのこと。加賀江沼郡では其の大小を問はずグズンボと云ふ。

コビラグチ 土佐高知市附近の民家の妻の方の入口のこと。

ゴンバイ 加賀江沼郡南郷村では雪搔のこと。大聖寺ではコスキと云ふ。丹後與謝郡ではテンヅキと云ふ。

越前今立郡下池田村あたりではバンバと云ふ岩代南會津ではコシツペラと云ふ。

サガラ 上野利根郡水上村では十鍬のこと。

サガンボ 磐城石川郡では氷柱のこと。越後長岡ではカネツコホリと云つてゐる。岩代伊達郡あたりでは單にアマダレと云ふ。

サツクリ 加賀江沼郡で農家の野良着のこと。丹後與謝郡ではドンザギモンと云つてゐる。

サルツバカマ 岩代會津でモンペイの一種、モ

ンペイを參照。

サンデン 丹後與謝郡では小作農夫のこと。

サントク 京都では火架三脚のこと乃ち東京で云ふ五徳のこと。

サンマイ 加賀では茶毗場又は墓場を云ふ。地名にも寺名を冠したもの等が多く見られる。

シセキ 武藏入間郡比企郡ひきあたりで家の周りの林を云ふ。主として杉、櫻、檜を植える、現今では比企郡松山附近ではヤマ入間郡では圍

木きとか屋敷木とか云ふて餘り用ひられない言葉であるさうだが猶古老の間には屢々之れを用ひられてゐる。

ジミ 越後長岡では蚯蚓のこと。

ジユウヤク 越前今立郡大野郡では蕺菜ざくさいのこと、下總佐原、岩代南會津ではジゴクンバ、加賀江沼郡ではドクナベと云ふ。

シンシバリ 武藏比企郡で上大黒柱下大黒柱とに架渡す梁を云ふ。

ジンダンボ 武藏入間郡では檜の木のこと。

スクモ 丹後與謝郡では靱糠のこと。

ズリ 上野利根郡水上村では鋸を云ふ。又磐城田村郡、石川郡邊りではノコズリと云ひ又略してズリとも云ふことがある。因みに土工や大工の言葉ではノコである。

セガイヅクリ 武藏秩父あたりで二重檜の造りを云ふ、因みに磐城石川郡方面に戸袋にセンガイ造りなるものがある。

センチ 丹後與謝郡加賀江沼及び土佐では共に廁のことであるが加賀江沼郡に於てはセンチヤとも云はれてゐる。

センバ 加賀、能登、越後、土佐で十能のこと。ダイジンバ 丹後與謝郡では虎杖いたざりのこと。

タカンボ 加賀江沼郡で夜陰に出現する怪火、近年は余り出現しないが二十年以前頃迄は時々々たもので突然向ふの山の麓を等距離に數十の提灯の火の様なものが並んで現はれてそれが直線に走る、そうして急に消えて又他方の山裾へ現はれるものである。

タナ 武藏入間郡では藁屋の簀子すしのこと。

タツペ 武藏入間郡では霜柱のこと。

ガラオケ 常陸久慈郡では肥桶のこと、又たフリオケとも云ふ。

ダンシキ 丹後與謝郡では菝蕪まろごりいひらのこと。

タンバタラウ 丹波太郎―丹後與謝郡で夏期の團雲のこと、加賀江沼郡では信濃太郎と云ふてゐる。

デゲ 丹後與謝郡で自個の聚落の地を指して云ふ、吉津村須津すづ及び文珠ぶんじゆの聚落にはデゲなる小字名がある。

デシヤ 萬草ちまきのこと、越後新發田ではデシヤ、岩代南會津郡江川村ではヂサンガラ、上野前橋附近ではウシコロシ、安房南三原みなみはらではコシイレと云ふ、石工の玄翁の柄によく用ひられ又會津ではワカンシキに之れを用ふる、之の實は山連に食はせる。

萬葉(二、四六九)に「山萬草の白露おもりうらぶる、心を深み吾が戀ひ止まず」

チヤノキビ 越前今立郡下池田にては玉蜀黍のこと。

ツブ 磐城石川郡、岩代南會津郡、加賀江沼郡では田螺のこと、武藏入間郡の精明村、高麗川村などに圓野（まぶら）と稱する水田の小字名が多く見られる。磐城石川郡野木澤村には圓谷（つぶら）と云ふ姓が見える。

デエー 加賀江沼郡の農家では大概佛壇の安置してある前の間のこと、これは這入つて大概右側の奥に當つてゐる、武藏野及び上總市原郡あたりでは奥座敷を云つてゐる。

デクロ 丹後與謝郡では小さい鰻虎魚（うなぎ）のこと。
テフマ 岩代南會津郡で蝶のこと。
因みに測量工夫の言葉では細い短かい蔑に紙を巻いて測串（びん）の代用とするものをテフマと云つてゐる。

デンヂ 武藏兒玉郡では所謂炉端（ろたん）の上り口のこと、加賀では所謂連子口のこと。
デンヂラゴ 丹後與謝郡では寄居蟲（やまがり）のこと。

ドツメ 上野利根郡水上村では桑の實のこと、加賀江沼郡ではツバメと云ふ。

トンボ 土工の言葉で、トンボ出しと云へば或高さを、しるす爲に木或は竹の先に短かい木片及び附木を、其の求むる高さに取付けること、又は凡ての物の頂上をトンボと云つてゐる、但し橋梁關係のもののみには之れの代りにタツバなる言葉を用ひてゐる。

而して「トンボ打つ」と云ふと轉覆のことである。

トンボグチ 磐城岩代一帯に家の入口を云ふ、而して表口をオホトンボと云つてゐる。武藏入間郡ではトボグチと云ふ。

ナゴ 丹後一帯に涉りてナグ、ナゴなど云ふ地名が多い、與謝加佐の郡界の西北方は長尾と書いてゐるが、これナゴを漢字に當てたものである。

地形は該地の如く峻涯の地もあれば中郡の奈具の如く穩かな山の麓にも附せられてゐて

予の經驗丈けでは未だ傾向付けらるゝ特徴を
發見し得無い。

ナゼ 上野利根郡で雪なだれのこと、雪なだれ
が來たと云ふことを、ナゼがついたとか、ナ
ゼが來たとか云ふ。

ナデ 越後の舊新發田藩しはたの領内では箒のこと、
藩主伯耆守たりしを以て、之れを避けて斯く
云ふたと云ふ。

ナラキ 安房鴨川あたりでは西風を云ふ。

ニハツトリ 上野前橋附近及び甲斐南都留郡あ
たりで鶏のこと、古語であることが面白い。

ニユー 加賀江沼郡で藁及び薪を長方形に積上
げたるものを云ふ、又之れを大なるものゝ形
容詞にも用ゐてゐる。

ヌルメ 岩代會津地方の山間部で田へ水を引く
に其儘では余りに冷めた過ぎるから、之れを
一旦池に導いて温めて後、田へ注ぐ、此の池
を云ふのである。

陳造の註に「房陵人謂澹水溉田曰酉」

ノシ 周防熊毛郡田布施町たぶせ宿井邊しゆくゐでは米の磨ぎ
汁を云ふ。

ノポリト 多く登戸と書かれてゐる。武藏入間
郡に此の小字名が多い。橘樹郡生田村あたり
にも此の地名がある、予の見たる例のみで云
へば穴勝登り口の地なるが故に名付けられた
とも思へない様である。

バツチヨサマ 信濃北作郡小諸あたりで大工の
こと、番匠さまの訛であらう。

バツチヨガサ 丹後與謝郡では竹の皮の笠のこ
と。

ハリノキ 加賀や丹後で榛の木のこと。

ハリガヘシ 加賀江沼郡潮津邊うしほつでは屋根勾配一
割のことを云ふ。

ハンゲンタラウ 武藏入間郡では榛の木の蟲の
こと、又たシナン太郎とも云ふ。

ハンチャ 加賀江沼郡では農家で着る絆天のこ
と。

バンク 武藏入間郡あたりでヲサキ憑きの家

を云ふ。

ヲサキに關しては富士川游博士の信仰と迷信にも少し述べられ又雜誌「毛野」四にも載せられてゐるらしむから別に解説を試みる必要もないが此處に餘分乍ら予が武藏飯能で聞いた話を一寸挿入して見る。

ヲサキは其形鼠より少しく大きいもので尾が二つに裂けてをり眼が堅である。群居してゐるもので多くの子を生むが身體を滅多に顯さない。之れが人に憑くと常に色々の重寶な事を耳許で囁いて呉れるので株を遣つたり物の賣買などして決して失敗することがない。囁いて呉れたら必ず頷かねば頷く迄同じ事を繰返して告げる。だから人と話してゐて頷かなくとも好い時に頷く様な人があるとヲサキ憑きだと云はれる。

ヲサキ憑きの人があつても或人に對して悪感情を抱くと憑いてゐるヲサキは直ぐ氣を利かして其の或人を病氣にしたり非道いのにな

ると死なしたりして失ふ。

又たヲサキの一群が夜中に饅飩粉とか蕎麥粉とか擴げてある家へ忍び込んで、これを身體中へ付けて自分等の憑いてゐる家へ行つて身據ひして落し之れを何遍となく反覆して朝までには多くの粉を運んで失ふと云ふ様なことを遣る。故にヲサキ憑きとかバン／＼とか云ふと大變嫌はれる。バン／＼と縁組することも甚だ忌まれてゐる。

バン／＼とは代々ヲサキが憑いてゐる家である、ヲサキが憑くと皆身代が好くなるので、バン／＼は悉く此の地方の方言の所謂ダイジンコ即ち富豪である。名栗川なぐりの沿岸、殊に飯能から奥の山地には、之れである噂されてゐるダイジンコが多い。

ヲサキが憑いてゐる家ではヲサキに三度の食事を與へる、飯櫃を二階に持つて上つて杓子で飯櫃の縁をトン／＼と叩いて降りて失ふ。そうすると澤山のヲサキが寄つて來て飯

を食ふのである。それだから普通の家で飯櫃を叩くことは非常に忌まれてゐる。

飯能第一尋常高等小學校訓導光田常三郎氏は常陸筑波郡島名村河原崎に住む保田某なるヲサキを使つて占ひをする老人の菴室で偶然にもヲサキを見たことがあると。安成三郎氏はヲサキは管狐のことか或はその一種ではあるまいかと。

ヒカタ 丹後與謝郡では夏期南微東方より吹く生温き風を云ふ。

ヒキツケ 常陸久慈郡大子あたりでは駒下駄のこと。

ヒジリ 丹後與謝郡では蟋蟀のこと。

ビツシヨウ 越前今立郡大野郡では抱石魚のこと。

ヒラガリ 加賀江沼郡で晝に田から上つて來ること、及び晝食のこと、夕方上つて來ることはユダガリと云ふてゐる。

ヒヤゴ 丹後與謝郡では鷗のこと、又たカゴメ

とも云つてゐる。

フゴ 上野利根郡薄根村あたりではタスのことを云ふ、同じ利根郡でも水上村邊ではタスと云つてゐる。此の邊のタスは麻糸摺りの繩で作つたものが多い。タスに就いては語彙を參照。

ベエー 加賀江沼郡で女の守つ子のこと、丹後與謝郡ではダアと云ひ同じく中郡峰山地方では十と云ふ。

ヘカヤキ 石見安濃郡波根あたりで行はれる肴の頭や肉を葱、しらたき等と一處に鍋に入れて煮ること、但しごつた煮にはせず醬油も少なく頗る淡泊な煮方をする。ヘカヤキ用の土製の焜炉や鍋が出來てゐる。出雲杵築あたりでも盛んに遣るらしむ。

ベタヒキ 近畿及び丹波丹後で馬車挽きのこと。

ヘラコ 丹後與謝郡で駒下駄のこと、加賀ではボクリと云ふ、尙加賀でバンバボクリ又はバ

ンバグタと云ふは東京に於ける庭下駄の様な形をしたもので臺所専用である。

ベンベゴ 丹後與謝郡では蚊蜻蛉かげろふの幼蟲を云ふ。

ポツカ 越前今立郡下池田では荷物持ちのこと。

ポット 越前今立郡下池田では蛙のこと。

ホツボ 越前今立郡では冬期子供の被ぶる蔭帽子のこと。

ホド 仙臺あたりで炉の中の玉石で圍みたる火床のこと。

ホ、 丹後與謝郡の童語で鶏のこと。

ポヤ 上野利根郡の奥地で雑木の薪のこと。

萬葉(四、一三六)に「あしびきの山の木末こゝろの寄生取りかぎて挿頭かざしつらくは千年壽ちとせぐとぞ」を思ひ出される。

マキタテ 武藏入間郡では竹籠の中に藁を詰めたるものを天井より振下げて串だの錐だの目刺し等さして置くものを云ふ、岩代伊達郡や

南會津郡では之れをベンケイと云ふ。

マセツボ 上野利根郡水上村では馬小屋の前に架け渡してある棒のこと。

マツコブチ 炉の縁の枠、岩代會津でも斯く云ふてゐる。之れに疵など付けることを思ふで非常に大切にす。

マンブ 近畿山陰北陸一帯で隧道のこと、但し山陰でも出雲はマンブ、北陸でも越後三魚沼中頸城地方ではマンボと云つてゐる、近江ではマンポー、遠江小笠郡あたりではマンポーと云ふ。

岩代二本松及び會津あたりではドウモンと云ひ仕事師間の言葉としてマンポーと云はれると云ふことにされてゐる。

鑛山ではシキと云ふ言葉と共にマンブと云ふ語を並用してゐる、鑛山や隧道などでドウモンなど、云ふ言葉を使ふことは思まれてゐる。交通用の隧道掘鑿などで山の好い様な處ならばアナと云ふ言葉は現今では左程思まな

くなつたが鑛山では今でも嚴重に忌まれてゐる。

「人倫訓蒙圖彙」の銀掘りの項に「金銀銅等石中より出る此の穴を真吹と號す。」

「後狩詞記（日向奈須の山村に於て今も行はるゝ猪狩の故實）」のマップの項に「傾斜したる小谿の水源又は小迫の頭に塚狀を爲し居る處を云ふ、猪は大概マップ下を通過し巨猪は群犬を茲に引受けて鬪ふ。」

「出雲方言考」のマップの項に「横穴、トンネル、まんぶ、と云ふ、簸川郡の、まんぶ川は、まんぶを流れ通る堀であるから名づけたものである。云々」

ミツセギ 武藏入間郡吾野では板屋根の兩妻の上部に樗掛けに貫を違えて縁としたるものを云ふ、越後南魚沼郡上郷あたりではカザガヘシと云ふ。

ミヨウジ 丹後與謝郡で虹のこと。

ムカヒザ 岩代會津地方で炉邊の稱であつて客

座とされてゐる。

コシモト(妻)

ヨコザ
(主人)

ムカヒザ(客)

ろ

キジリ(子供或は下男等)

ムクロドメ 家翁曰く越後今立、大野あたりで耳にしたる名なるも其實物を知らず或人の云ふ(加賀江沼の人)接骨木にて、ムクロモチ(加賀江沼で土龍のこと)の穴へ此木をさせばムクロモチの道を絶つより此名ありと。ムジャウダウ 加賀では火葬小屋を云ふ、乃ち無常堂である。

メタゴ 丹後與謝郡では科斗のこと。

メド 磐城田村郡では穴のこと。

メ、デヤコ 加賀江沼郡及び越前坂井郡で丁斑魚のこと。

メンゲエーナ 岩代南會津郡では可愛い名のこと、因みにメンゲエーとは岩磐地方を通じて可愛いと云ふことの方言である。メンゲエー

名とは子供が生れると命名される迄と云ふ積りて母親や祖母達が長男ならター或はター〜二男ならばター三男ならばサブと呼ばれる名である。今予の旅寓(會津)の傍らに俗にヘイタと呼ばれる青年がある、之れ本名平一と云ふのであるが幼時ター〜と呼ばれてゐたのを小學校へ通ふ様に成つてから本名と幼名とを撞き混せて誰呼ぶとなくヘイタと呼ぶ様に成つた。而して彼自ら曰くヘイタはオラのメンゲエーナであると。

加賀江沼郡南郷村あたりでは可愛い名と云つてゐて大抵次の數語を夫々付けられる乃ち男兒には、オポコ。コバウ。タン。タンバウ。女兒には、チイ。チイコ。

モケ 丹後與謝郡では昔のこと。

モツツ 加賀では圓壺形の型に詰めて盛りたる飯及び其の圓壺形の器具の稱。農家で俗に御講様ごさまと云ふ門徒の寄合に饗應せらる、女達は食はずに手拭に包んで持つて歸るが堅く詰め

であるから型が崩れない。

西鶴の「俗つれ〜」卷三の越前永平寺の條に模相とあるは乃ちこの物相ものさま飯のことである。

モン、ンカ 上野利根郡水上ではバンドリのことを云ふ、バンドリのことは語彙參照。

モンベ 上野利根郡水上村では單にハカマともユキバカマとも又はマツタとも云ふてゐる。

然しマツタは斯うも云ふと云ふに過ぎない言葉であつて平生には用ひられてゐない。羽前新庄邊ではマタシヤンと云ふとも云ふが、之れも其れに類する言葉でないだらうか。尙上州では一般にモンペイと云つてゐる、越後南魚沼郡土樽つちたるあたりではサンバクと云ふ。

越前敦賀郡ではキヤルサン若狹から若狹寄りの丹後ではカルサンと云ひ丹波綾部ではタツツケ、山城は高雄善妙寺あたりタチカケと云ふ、此邊では女ものは九尺を四ツに切つて作り、男ものは一丈である。此の邊大正初頭

頃までは眉を剃り、齒黒染めて半巾帯を締め四巾の前垂まいたれをして前に手拭を疊んで提げてゐたのであるが此頃丹波寄りの山方のものは皆タチカケを用ふる様になつた、今でも向日町、山崎あたりでは履かないさうである。

却説、信州木曾でもカルサン、伊那ではタツツケ、羽前米澤あたりではモンベ、陸前志田郡ではモコ、岩代會津あたりでは矢張りモンペイと云つてゐるが濱通り（福島縣の海岸地方）の或一部ではモツクラとも云ふとか聞いてゐる。猶ほ岩代會津邊ではモンペイに二種類ある、一は乃ちモンペイ。二はサルツバカマ。一は平生の長着物の上へ履くものでダブ、としたもの、二は仕事着の上へ履くものでダブ、してゐない、所謂山行き用である。

ランバ 磐城石川郡では墓場のこと。

ランビキ 丹後與謝郡で棟の梁を云ふ。

ワカ 岩代南會津郡大内あたりで女の占者のこ

と。

ワノミ 京都善妙寺あたりで頭に物を載せる時、頭の上に敷くもので藁の輪を布で巻いたもの、分曉の時之れを頭上に置くと安産すると云はれてゐる。

ピソソ 岩代南會津郡江川村附近の字名に何々居村と云ふのが多い、又た此れと並んで居平と云ふのもある。共に聚落の地に名付けられたものであつて居村は谷の中及び平地に於ける聚落地、居平は河段丘の上及び山腹の聚落到に名付けられてゐる。

ピネ 丹後與謝郡では堰のことを云ふ、朝妻村に伊根と云ふ部落あり尙栗田村くんだや吉津村、山田村に勾々キネと稱する地名が多い。

萬葉（二、七二七）に「朝東風に井堤いであ越す浪のまさかにも逢はぬものゆゑ瀧もとゞろに」又（二、七二一）「玉藻刈る井堤いであの籬薄みかも戀の淀める吾がこゝろかも」

ピモラ 丹後與謝郡では蝶みどりのこ、岩代南會

津郡江川村ではイモホリと云ふてゐる。

ヲ山城丹後越前では峯のことを云ふ、これに因む地名も枚舉に違ない程である、岩代會津

附近ではソネと云ふ、又之れに因む地名頗る多い。(完)

(三三二—二七)

世界戦後の地名考 (四)

瀧川規一

アクリントン(Accrington)。英蘭ランカシアの選舉區にして開市場の都會。ハインドバーン(Hindburn)河畔に在りLMS鐵道によればマンチェスタ(Manchester)の西北二三哩にある。紡績業の一中心地であり漂白業、綿布捺染業、染物業の工場、化學藥品、織物器械の製造場等があり産業の重要都會である。附近には石切場、炭坑がある。セイント・ゼームス・チャーチ(St. James's Church)と呼ぶ教會があり

一五五四年の創立にして一七六三年の再建である。市公會堂、取引所、機械研究所その他の建

物は皆近代的設備である。ヘンリ二世(一二三三—一八九)の治世中にその名初めて現はれ、一八七八年には自治體の特許を與へられた。議會に一名の代議士を擇出す。開市日は火金土の三曜日である。人口四萬四千に近い。

アセルタマ(Acelandama)。地名の意味はアラマイク語で血の場所と云ふ意である。ゼルサラム(Jerusalem)の南方にある一地點であつて現代のハクエドダム(Haked Dam)と云ふ處である。聖書にある無縁墓地(Potter's field)若くはジュダ(Judas)が主を裏切る爲めに贈つた